



甲州街道と芸能

江戸幕府の直轄地だった甲府では、最新の芸能を上演して観客の反応を見るモニター上演が頻繁に行われていました。特に歌舞伎は盛んに行われ、役者たちが甲州街道を通して甲府に集うと共に、多くの甲州人が公演を観に来ていたといえます。

その影響を受け、江戸時代の甲州街道沿いでは様々な地域の芸能が生まれました。例えば、栗原宿の村芝居や、笹子の「追分の人形芝居」などです。栗原宿にある大宮五所大神(山梨市)は社殿が舞台造りになっており、甲府に行く前の役者たちはここで芝居をして評判を確かめたといわれています。拝殿には村芝居の一場面が浮世絵風に描かれた絵馬が残っています。また、笹子の「追分の人形芝居」は現在も地域の人々によって受け継がれ、活発な公演活動をしています。

旅する人々の記録

江戸時代以降、旅人の日記(道中記)や旅をテーマとした文学作品が盛んに著されました。甲斐をテーマにしたものとしては、『甲州日記』、『身延参詣甲州道中膝栗毛』などがよく知られています。『甲州日記』は、江戸時代を代表する浮世絵師・歌川広重(うたがわひろしげ、1797年-1858年)の日記です。甲府道祖神祭りの幕絵を制作するため、甲州街道を通して甲府を訪れた広重の旅の様子やスケッチが綴られています。仮名垣魯文(かながきろぶん、1829年-1894年)の『身延参詣甲州道中膝栗毛』は、弥次さん・喜多さんが身延詣を行う道中を描いた滑稽本です。二人が勝沼宿のブドウ棚の下で、ブドウを売ろうとする女性とやり取りする場面などが面白おかしく描かれています。こうした道中記や文学作品からは、当時の人々の旅の様子を知ることができます。



『身延参詣甲州道中膝栗毛』(山梨県立博物館蔵)

甲州街道の公的な用途-お茶壺道中

江戸時代、幕府の将軍が飲むお茶は、格別の威儀を持った行列「お茶壺道中」によって宇治(京都府)から江戸まで運ばれていました。宇治で採れた新茶を運ぶため、6月に出立して中山道を通ったお茶壺道中は、下諏訪宿(長野県)から甲州街道に入り、江戸へと向かいます。一部は富士道(谷村路)を通して谷村(都留市)の勝山城に設けられた茶壺蔵で冷蔵し、10月上旬になると茶壺受取の役人が受け取りました。「ずいずいずっころばし ごまみそずい」で始まるわらべうたは、お茶壺道中を茶化して歌ったものです。「茶壺に追われてとっぴんしゃん 抜けたらどんどこしょ」という歌詞は、お茶壺道中が通ると戸をしっかりと閉めて役人に因縁を付けられないようにし、過ぎたら戸を開ける様子を表しているといわれています。



甲州街道 韮崎市上空から甲府盆地方面



追分の人形芝居